雪の結晶に関する日本人の初期の知識*

田　村　専之助**

要　旨

雪の結晶は中国人によって B.C. 2世紀以前に発見され，西欧人の発見は 17世紀 にくだるのである．それならば日本人はいつ，いかにしてこの知識を得たのであろうか．この問題に関して論ぜられたのをまだ聞かない．これは私の寡聞のせいであろうか．ともかく，ここに私の試論を提出する．

1. 序　説
2. 日本人の初期の知識
3. 結　語

1. 序　説

私はかつて中国人の雪の結晶の発見に関する研究を学界に問い（史観・昭和30年9月），故中谷宇吉郎博士によって米国の学界へ御紹介をいただいた．それ以来，日本人が初めてこの識見に接したのはいつか，ということを心にとめてきた．いま不完全ながら，ひとつの仮説的私案を得たのでご批判をあおぐことにする．

2. 日本人の初期の知識

三条西実隆の文明6年(1474)正月から天文2年(1533)7月までの日記，実隆公記・巻1・文明6年正月条に，

　九日乙未，天晴六花少落．

　十八日甲辰，六花落．

とあり，足利義政(1435～1490)，義尚に優遇された道興准后の廻国雑記には，

　おしなべて草木にかわる色もなし，誰かは六の花とみるらん．

とみえるが，六花・六(むつ)の花という言葉は雪の結晶の認識という科学史上の重大な事実に基づくことは言うまでもない．しかし，こういう言葉は記紀その他の古典，万葉・古今・新古今などの歌集にはたえて見えない．これは雪の結晶に関する知識が元来日本人のものでない証拠といえる．中国人が世界にさきがけて結晶を発見したのは，おそく見ても B.C. 2世紀以前のことであり，具体的には韓嬰の韓詩外伝に“凡草木花，多五出，雪花独六出．”とある名高い一文である（拙著・東洋人の科学と技術：中国気象学史研究・下巻・pp. 94～5）．宇多天皇時代日本に来ていた中国の典籍名を列記した藤原佐世の日本国見在書目録に韓詩外伝・10巻があるから，この頃からでも，結晶の知識を吸収しようと思えばできたはずである．ところが上記の韓詩外伝の一文は，太平御覧・3巻に引かれているが，太平御覧は中山忠親（？～1195）の山槐記によれば12世紀末の渡来であることが明白である．とすれば，日本人の知識淵源がどれによったかも問題となる．あるいはまた，唐詩の影響の深さを思うと，唐の詩人賈島（779？～843）の寄令狐綯相公詩の一句“自著衣偏暖誰愛雪六花．”の六花が直接の知識淵源であったかも知れない．いずれにしても，日本人が雪をその結晶名で呼んだのは，六出（韓詩外伝）・六花（賈島）によったのに違いなく，やがて六(むつ)の花となったのであろう．そうして，かような認識を最初に得たのも，15世紀の終わりを溯ること遠くない頃であったろうと推定される．

雪の結晶に関する中国人の識見が輸入された頃と推定される年代の歌集，新古今を見ると，

　またや見む交野(かたの)のみ野のさくらがり，花の雪散る春のあけぼの．（巻第2・春歌・下・皇太后宮大夫俊成）

のように花を雪と見るほか，雪を花と見ることが多く，

　春来ては花とも見よと片岡の，松のうは葉にあわ雪ぞ降る．（巻第1・春歌・上・藤原仲実朝臣）

　いづれをか花とは分かむふるさとの，春日の原にまだ消えぬ雪．（同・凡河内躬恒）

　梅が枝にものうきほどに散る雪を，花ともいわじ春

---

* On the first stage knowledge of snow crystal in Japan.

** S. Tamura, 三島科学史研究所．

の名だてに．（同・源重之）

山ざくら散りてみ雪にまがひなば，いづれか花と春にとわなむ．（巻第2・春歌・下・伊勢）

草も木も降りまがへたる雪もよに，春待つ梅の花の香ぞする．（巻第6・冬歌・右衛門督道具）

のようであるが，雪を花とは見ても，衆合体としてであって，結晶の個体の観察に基礎を置くのではなく“むつの花”としてではない．ひとたび結晶の知識が輸入されても，なかなか定着はせず，たまたま衣の袖に舞い降りた雪片の正体を凝視して驚いたのは，限られた少数の人びとだけであったに違いない．このようなのが雪の結晶の知識受容の初期の実情であったと推定される．そうして土井利位（1789～1848）に至って，虫眼鏡（めがね）によって結晶がたんねんに観察され，図写されて雪華図説の正・続篇の出現となり，ついに芸能界にさえも多大の影響を及ぼし，六花・むつのはな・陸花（むつのはな）・六出・雪（むつのはな）・雪梅（むつのはな）・雪花（むつのはな）などと記され，俳書・歌舞伎脚本・長唄・義大夫節などの題名として広く行なわれもしたのである．

3. 結　語

世界にさきがけて，中国人によって雪の結晶の発見という業積があげられたのは B.C. 2，3 世紀以前のことであった．なるほど後世になると日本においても，結晶の精密な観察とその図写という成果もあげられはしたが，歴史において最初に結晶に関する知識が日本に紹介されたのはいつか，どんな仕方によってか，の問題に対する私の私案は上記のごとくである．雪の結晶に関する中国人・西欧人・日本人の業積に関しては中国気象学史研究・下巻・pp. 94～105 を参照されたい．